

# 花 AfraAsia NEWSLETTER

アフラシア ニュースレター

発行：龍谷大学アフラシア平和開発研究センター <http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/>



▲シンポジウムの様子

## 国際学術シンポジウム開催

### よみがえるルース・ベネディクトー紛争解決・文化・日中関係

2008年12月6日、龍谷大学深草学舎にて、国際学術シンポジウム「よみがえるルース・ベネディクトー紛争解決・文化・日中関係」が開催された。このシンポジウムは、龍谷大学創立370周年を記念するイベントの第一弾として位置づけられ、若原道昭学長も挨拶に駆けつけた。

ベネディクトの『菊と刀』は60年経ってなお、各国で翻訳され、特に中国ではベストセラーとなっている。なぜ今『菊と刀』なのか。シンポジウムでは、ベネディクト研究の最新の成果と、現代中国における『菊と刀』ブームを検討し、紛争解決に果たす文化研究の役割について議論した。

来場者は50名を越え、一般の方々も多く、関心の高いテーマであることがうかがわれた。なお、シンポジウムの内容は、アフラシア研究シリーズ6として近日刊行予定である。

#### 基調講演

#### ポーリン ケント氏「ルース・ベネディクトの個人的背景と『菊と刀』の誕生」

ポーリン ケント氏（龍谷大学国際文化学部教授）は、ベネディクトの個人史を丹念にたどりながら、『菊と刀』誕生の背景を明らかにし、その魅力と再評価の要因を説明した。

ケント氏は、ベネディクトの個人史における三つの経験（片耳が聞こえないこと、女性であること、同性愛者であること）が、類まれな文章力、反差別に対する意志、文化の多様性への関心を生んだと指摘した。また、『菊と刀』が異文化理解の必読書として再評価されているのは、文化人類学に対する貢献、文化の比較という方法論、研究の学際性によるという。特に、日常生活の細部に注目し、写真や雑誌等を資料として駆使する方法は、今日の文化研究にも引き継がれていると締め括った。



▲ポーリン ケント氏

#### パネルディスカッションⅡ 「東アジアと日本文化論」

第2部では、まず、胡備氏（天津理工大学外国語学院准教授）が「中国における『菊と刀』の翻訳」と題して報告した。胡氏は、中国における『菊と刀』の翻訳の現状を概観し、12を超える訳本から三つのテキストを分析した。翻訳水準が高まり、多くの読者を獲得する一方で、誤訳や解説不足が懸念される状況を示した。また、同じ漢字圏であるからこそ、「義理」等の文化概念の相違に十分配慮する必要性を指摘した。

次に、郭連友氏（北京日本学研究中心教授）が「中国における『菊と刀』と日本研究」と題して報告した。郭氏は、中国における『菊と刀』のベストセラーの背景には、小泉元首相の靖国参拝を引き金とした歴史認識問題があると同時に、日本理解によって膠着状態を打開しようとする傾向があることを示した。『菊と刀』ブームは、日本の文化や歴史に目を向けさせるきっかけとなったと指摘した。

最後に、濱下武志氏（龍谷大学国際文化学部教授）が「東アジア論再考—R.ベネディクト、J.ダワー、庄錫昌：三者間の相互視野」と題して報告した。濱下氏は、『菊と刀』中国語版に加えられた膨大な挿絵・写真とその解説から、中国人知識人のメッセージを読み取る。そこでは、アメリカ経由の日本文化論をとり入れつつ、戦後日本を視野に入れた、多様な日本人論が展開されていると指摘した。こうした日本人論の多様化は、急速に変化する中国における、中国人論や地域文化論の必要性を反映しているとした。

#### パネルディスカッションⅠ 「戦争にみる異文化理解」

第1部では、まず、土屋礼子氏（大阪市立大学大学院文学研究科教授）が「心理戦における日本研究—『菊と刀』の背景」と題して報告した。土屋氏は、連合国軍側の宣伝ビラの作成過程において、日本文化に対する認識がどのように作られたかを明らかにした。そして、心理戦は日本研究の萌芽であり、異文化理解の側面を持っていたこと、『菊と刀』はその最大の果実であったことを指摘した。

次に、ポーリン ケント氏が「ルース・ベネディクトによる文化理解と紛争解決の関係」と題して報告した。ケント氏は、ベネディクトが日本文化のコンテキストから行動を説明したことによって、「人間的な」日本人像を描くことに成功したという。こうした『菊と刀』の叙述は、読み手の自文化中心主義を自覚させるものとなっていると指摘した。

討論者の福井七子氏（関西大学外国語学部教授）からは、「ルース・ベネディクトとジェフリー・ゴラー」に関する論点が提示された。福井氏は、ベネディクトに先立ち日本人の行動を研究したジェフリー・ゴラーが、ベネディクトに与えた影響を新たな資料に基づいて明らかにした。



▲土屋礼子氏



▲福井七子氏

#### 質疑応答

質疑応答における主な論点の一つは、米軍の日本占領における『菊と刀』の役割である。土屋氏は、同書が直ちに和訳されたことから、米軍はその重要性を認識していたと答えた。もう一つの論点は、紛争における文化理解の役割である。郭氏は、『菊と刀』ブームは、日本文化を漢字文化圏の一部として捉えるのではなく、独自の文化として理解する契機となり、文化理解によって、日中間の膠着状態を乗り越える可能性があることを示唆した。

(RA 松井智子)



▲胡備氏



▲郭連友氏(左)、濱下武志氏(右)

## ◆ 1 班の班活動より

## 「アジアにおける国際紛争問題」



▲佐野氏

2008年度の第1班は5回の研究会を開催し、12月には、龍谷大学国際文化学会との共催で「東アジアにおける近現代史教育—学校教育は和平構築に貢献してきたか」を開催、三つのセッションにおいて歴史認識をめぐる国家間の紛争解決に向けた取り組みについて報告が行われ、総合討論では多国間の活発な議論が交わされた。

本年度の研究会は、アジアにおける「紛争」をナショナリズム形成、人権問題、社会運動、国際秩序形成の幅広い観点から捉え、10人が報告を行った。ここでは、佐野東生氏（龍谷大学）、戸塚悦朗氏（龍谷大学）の報告を取り上げる。

第1回研究会にて、佐野氏は「イラン・ナショナリズムとタキーザーデーアゼルバイジャン分離問題をめぐって」というタイトルで報告を行い、タキーザーデー（1878～1970）を始めとする知識人によるナショナリズム形成史の視点から、19～20世紀のイラン・ナショナリズムを再評価した。中でも注目したのは、「一民族・一言語」的ナショナリズムに対抗する概念としてタキーザーデーが提唱した、イラン内部の民族の多様性を包摂した緩やかなナショナリズム（文化多元主義的ナショナリズム）である。アゼルバイジャン問題に関しては、①石油利権や第二次大戦後のソ連軍撤退を巡る大国（英・米・ソ）、国際機関（国際連盟、国連）の介入および対ソ二国間交渉、②アゼルバイジャン自治政府の生成と消滅、という歴史的展開の中で国際紛争問題として取り扱った。

討論では、分離問題を民族地理的背景と歴史的文脈に置き換え、イ

ラン・ナショナリズムの構造を integration の方向性から理論的に分析すること、またイランの資源ナショナリズムとの関連性の検討など今後の課題が示された。

第2回研究会にて、戸塚氏（龍谷大学）は「国連人権機構改革がアジア地域紛争解決に及ぼす影響に関する研究—軍性奴隷問題を焦点に」というタイトルで報告を行った。本報告では、軍性奴隷（sexual slavery）の概念規定と国際法の実践的適用に注目し、国連人権機構や国際専門機関等の国際手続を検証した。加えて、国際的イシューとして議題設定（アジェンダ・セッティング）に成功した NGO の活動に注目した。紛争解決における制度構築の観点から、国連人権機構改革の中でも国連加盟国の人権状況を審査する普遍的定期的審査（UPR；Universal Periodic Review）を取り上げ、アジア地域の紛争解決の可能性を示唆した。

討論では、軍性奴隷問題における戦争とジェンダーという二重構造の指摘や、問題解決や和解に向けたプロセスにおける被害者への対応が議論された。さらに、奴隷条約の歴史的背景の検証や西歐的国際法秩序とアジアの法秩序の対立という視座の必要性が示された。国連システムにおける非常任理事国の影響力の限界が指摘される一方、国連予算の配分の増大や、国際人権機構の特別手続の有効性、人権高等弁務官事務所の拡大に伴い、アジア・アフリカ諸国の影響力拡大に対する期待も示された。

（RA 山川貴美代）



▲戸塚氏

## ◆ 2 班の班活動より

## 「地域資源管理に対するグローバル化の影響と紛争解決」



▲左から、北原氏、ジュソーム氏、フォートマン氏

2008年6月29日に、第2班を中心とした国際セミナー「地域資源管理に対するグローバル化の影響と紛争解決」が開催された。これは、昨年度の国際シンポジウム「悲鳴をあげる資源—アジア・アフリカにおける地域共同体の持続可能性」のフォローアップとして行われたものであった。

基調報告1でジュソーム氏（ワシントン州立大学）は、持続可能な地域開発を実現させるためにはローカルな文脈のみならずグローバルな政治的・経済的・文化的諸関係をも把握したうえで適切な戦略を立てる必要があるとし、「商品連鎖」概念などグローバル化をめぐるさまざまな議論を紹介した。そして地域共同体は「グローバルに考えローカルに行動」し「ローカルに考えグローバルに行動」するだけでなく、さらに両者を「弁証法的に（dialectically）考えたうえで自省的に（self-reflectively）行動」することが重要だと述べた。

基調報告2で北原氏（龍谷大学）は、タイにおけるいわゆる「ルース（loose）」な構造の地域共同体による資源管理とその変容の歴史を詳細に論じた。そのうえで、特に近年グローバルな資源枯渇と地域の村内若年人口の減少とが進展している状況において、それぞれの地域

において複数の主体（政府・共同体・NGO等）の協同による資源保全のあり方を緊急に模索していく必要があることを強調した。

基調報告3でフォートマン氏（カリフォルニア大学バークレー校）は、今日ローカルな資源管理はグローバルなドナーやNGOなどの意向に大きく左右されるようになってきていると指摘した。そして、地域に根付いた知識・市民科学・通常の科学という三種の科学によるグローバルな知識ポリティクスをふまえた参加型調査を実施していくことが求められていると述べた。

その後さらに5名からの報告がなされたが、そのうち黒崎氏（一橋大学）は地域資源管理における領域横断的な協働が必要だと述べた。また中村氏（龍谷大学）は、国民国家イデオロギーとニュートン物理学を前提とする近代社会科学のあり方の限界を乗り越える努力をしていかなければならないことを力説した。

これらの報告はすべてプロシーディングス *Resources under Stress* (Afrasia Symposium Series 3) に含まれているので関心のある方は参照されたい。

なお本年度第2班ではこのほかに4回の班研究会と1回のSGSD研究会（若手研究者の英語によるプレゼンテーション能力向上をめざす研究会）を開催した。

（RA 石坂晋哉）



▲国際セミナーの様子

### ◆ 3 班の班活動より 「介護現場における異文化コミュニケーション」

2009年2月1日、龍谷大学大宮学舎清和館において、ワークショップ「介護現場における異文化コミュニケーション」を開催した。在日フィリピン人介護士は、母国と日本の文化・習慣・行動様式等の違いから、日本人介護士との協働に難しさを感じている。本ワークショップの目的は、在日フィリピン人介護士の訓練や雇用をめぐる問題とは何かについて、施設「現場」の視点から明らかにすることにあった。また、施設で働く日本人介護士（指導者）とフィリピン人介護士の方に参加していただくことで、同じ施設で働く文化背景の異なる人々との摩擦の原因やその対処方法を学ぶこと、加えて、お互いの理解を深める方法を学ぶことも重要な目的であった。

中井久子氏（大阪人間科学大学）による全体説明の後、ワークショップの参加者は、二つのグループに分かれて意見交換を行った。まず、日本人指導者のグループでは、後藤由美子氏（羽衣国際大学）の下で、主として雇用に関する話し合いが行われた。次に、フィリピン人介護士のグループでは、マリア レイナルース D. カルロス氏（龍谷大



▲フリートークの様子

学）を司会に、自立支援サービスにおける「自立」とは何か、また、チームケアとは何かについて、活発な意見交換を行った。そして、楢田優一氏（株式会社キャリアアップ社長）による「異文化の体験」と題する講演の後、高畑幸氏（広島国際学院大学）

は、(1) 介護現場における問題は文化の違いによって生じてはいるものの、社会的環境と訓練を通じて克服することが可能であること、(2) 異文化間コミュニケーションの問題を解決するためには、①フィリピン人どうしのつながり（特に先輩とのつながり）、②派遣会社、③現場のスタッフという、三つの当事者間における協力が欠かせない等、ワークショップのまとめとして、多くの重要な指摘を行った。

なお、外国人介護士の問題については、2009年6月20日（土）に龍谷大学において、朝日新聞大阪本社との共催でシンポジウムを開催する予定である。基調講演者として、上野千鶴子氏（東京大学）をお招きして、「誰が私たちの面倒をみるの？ーグローバル化とケア」（仮題）というお話をさせていただく予定となっている。

（ワークショップ主催責任者 マリア レイナルース D. カルロス）



▲グループ2の様子

### ◆ 4 班の班活動より 「資源をめぐる紛争と紛争解決を探る」

2008年度は、11月のアフラシア国際シンポジウムを見据えつつ、4回の研究会を開催し、6名が報告を行った。これらの報告は、開発に起因する資源分配の問題（＝紛争）と、資源へのアクセスの認知（＝紛争解決）が柱となった。ここでは、増田和也氏（京都大学）と望月克哉氏（日本貿易振興機構）の報告を取り上げる。

増田氏は、インドネシアのリアウ州を事例に、森林開発に由来する土地紛争が展開してきた過程をアダット（慣習）に注目しながら検討した。インドネシアでは、1960年代に森林帯の大半が国有地化され、それまで地域レベルで森林利用を規定していたアダットは大きく制限された。80年代半ば、リアウ州では焼畑耕作に依存してきた人々の森林帯にアブラヤシ大農園を開発する計画が浮上した。その頃、かつてこの社会で出自集団の補佐的指導者として存在したアダット・リーダーが都市部の知識人により再編成され、政府に対して慣習的土地権を主張し始めた。さらにアブラヤシの栽培ブームが地域住民にまで及ぶと、住民は開発から残された森林を私有地として主張するようになり、住民間の土地争論が頻発した。森林の私有地化はアダットの解体を意味するが、土地権を正当化する根拠としてアダットは多様に再解釈されていた。一般住民は、地域社会の成員としての「タナ・マシャラカット（住民の土地）」だけにアクセスが可能だったが、アダット・リーダーはというと「タナ・マシャラカット」に加え、地域社会の代表としての「タナ・ウィラヤット（出自集団が統治する領域）」にもアクセス可能となり、より多くの土地を獲得しようと権威を背景にアダットを使い分けたのである。

望月氏は、ナイジェリア南部のナイジャー・デルタ付近における問題を、石油資源とこれに関わる様々な「リソース」をめぐる紛争と位置づけ、それらの「リソース」をめぐる住民の取り組みや運動の展開、

今日の住民間の反目・対立を考察した。この地域では、1960年代以降、石油開発によって住民の生活が大きく変化したが、補償や富の配分に与れぬことで不満も蓄積し、特に90年代以降、激しい住民運動が展開された。氏はこれらの「闘争」の担い手となった集団について、90年代前半はアクティヴィストたち、90年代半ば以降は「青年」組織、近年では武装集団も登場したと整理した。運動の担い手は、センセーショナルな事件をめぐる国際報道メディアが作り上げたイメージが先行したものだった。以上、運動の担い手や地域住民が求めてきた「リソース」とは、当面の保証金や開発資金などの「資源」と、自らの社会的な位置づけや利益を向上させる「手段」という二重の意味合いをもったものであった。

二つの報告において、紛争は外部社会対地域社会、地域社会内部という二つのレベルで重層的に生じており、紛争解決の手段としては、慣習的な制度の読み直しや国際報道メディア・NGOの利用など、多様な論理や手法が導入されていた。

（RA 渡邊暁子）



▲増田氏



▲望月氏

## 『紛争』とは何か、『紛争解決』とは何か

2009年2月27日、瀬田学舎智光館にて、2008年度全体研究会を開催した。今回の研究会の目的は、本プロジェクトのキーワードである、コンフリクトの意味をさらに深く追求することであった。コンフリクトの概念に関する研究会は、2005年度第1回全体研究会「コンフリクトについて」と2007年度第1回全体研究会「紛争解決に関する理論研究」に引き続いて3回目となる。

今回の研究会では、M・ジョーンズ、A・C・フェビアン編『コンフリクト』（培風館、2007）を題材に、自然科学的視座と社会科学的視座からみたコンフリクトの概念をめぐる共通点と相違点は何か、コンフリクトの肯定的側面と否定的側面を分かちものは何かなどについて意見交換がなされ、議論は大いに盛り上がった。（PD 佐藤史郎）



研究会の様子▲

## 刊行物

## 《Afrasia Working Paper Series》

- No.38** Acharawan Isarangkura Na Ayuthaya and Senjo Nakai, *The Emergence and Development of Interfaith Cooperation: A Case Study of the Theravada Buddhist Advocacy for People Living with HIV/AIDS (PWA) in Upper Northern Thailand*
- No.41** Takehiko Ochiai, *Personal Rule in Nigeria*
- No.42** Toru Sagawa, *Why Do People "Renounce War?" The War Experience of the Daasanach of the Conflict-ridden Region of Northeast Africa*
- No.44** Kosuke Shimizu, *Nishida Kitaro and Japan's Interwar Foreign Policy: War Involvement and Culturalist Political Discourse*
- No.45** Julian Chapple, *Increasing Migration and Diversity in Japan: The Need for Dialogue and Collaboration in Education, Language and Identity Policies*

## 《アフラシア研究》

- No. 7** 樋本淳也、「インドネシアの農園における土地紛争—住民による不法占拠問題に関連する法令分析の視点から」

## 《Afrasia Symposium Series》

- No. 3** Proceedings of the Third Afrasian International Symposium  
*Resources under Stress: Sustainability of the Local Community in Asia and Africa*, 23-24 February 2008, Ryukoku University, Kyoto, Japan. Edited by Yoshio Kawamura, Hisashi Nakamura, Shiro Sato, Aysun Uyar and Shinya Ishizaka.

その他の刊行物については本センターのウェブサイトをご覧ください。http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp/

## 研究会リスト（敬称略）

## ■ 2009年2月1日 / 第3班共催ワークショップ

「介護現場における異文化コミュニケーション」

鎌田優一、高畑幸、ほか

## ■ 2009年2月27日 / 2008年度全体研究会

『紛争』とは何か、『紛争解決』とは何か」

ポーリン ケント、アイスン ウヤル、佐藤史郎、石坂晋哉、山川貴美代、松井智子、渡邊暁子

## ■ 2009年3月17日 / 第1班研究会

酒井啓子「中東における紛争と暴力化の契機」

土佐弘之「主体化の暴力について」

マイケル ファーマノフスキー "The Role of 'Niche' NGOs in Facilitating the Rehabilitation of Street Children in Vietnam: The Case of KOTO and Blue Dragon"

## お知らせ

## 朝日・大学パートナーズシンポジウム

日時：2009年6月20日（土）午後1時30分～午後5時

参加申込み等シンポジウムの詳細については後日、朝日新聞と龍谷大学ホームページを通じてお知らせ致します。

（関連記事 <http://www.asahi.com/shimbun/sympo/release/090122.html>）

朝日新聞大阪本社と大学が共催する「朝日・大学パートナーズシンポジウム（APS）」の2009年度上半期公募枠パートナー大学として、龍谷大学アフラシア平和開発研究センターが採択されました。今回採択されたシンポジウムは「Who cares? 誰が私たちの面倒をみるの?」で、本研究センターの研究テーマである紛争と解決の視点から、国際化が進む日本の高齢者介護を取り巻く諸問題（目に見えない紛争）と今後の可能性について取り上げます。基調講演として、『おひとりさまの老後』の著者である上野千鶴子氏（東京大学大学院人文社会系研究科教授）をお招きし、「誰が私たちの面倒をみるの? —グローバルゼーションとケア」（仮題）というお話をさせていただく予定です。

## アフラシアニュースレター 第8号 2009年3月

発行／龍谷大学アフラシア平和開発研究センター

〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷 1-5 TEL/FAX 077-544-7173 <http://www.afrasia.ryukoku.ac.jp>

編集／佐藤史郎、石坂晋哉、山川貴美代

印刷／株式会社 田中プリント